

## 第七章

### 不就学児童労働を考える

——なぜ、子どもは学校に行けないのか



ラージャスターン州サモッド県。農村部の公立小学校校門から校舎を望む。

## 一 インドは解き放たれたか

一九九一年から始まった経済自由化政策とグローバル化の波は九〇年代後半に入ると確かなる変革の力を生み出した。情報技術（IT）は基幹産業の構造を変え、そして都市の生活に活気をもたらし始めた。また、農業にもかかわらずないほどの変化が始まる。経済活動と人々の生活にインドがいまだかつて経験したことがないほどの変化が現れる。だれもが体験できるような目に見える変化が進行したのである。一九九二年、インドには通信革命ともいべき変化がみられた。南インド、マドラス市（一九九六年名称変更、現チェンナイ市）には携帯電話が街頭でも見られるようになり、これを国内通話用につかう私設路上電話サービスの商売が活況をみせた。微笑ましい光景が市内路上のあちこちに出現した。通信革命はほどなくして、電報からLT通信へ、そして瞬く間にFAXの普及へと急速に進展していった。業務用、個人用パソコンの普及もほぼ同時に進行した。大都市圏だけでなく地方都市にもIT革命の波が押し寄せ、確実に定着したのである。また、外資と技術の自由化はいまだ抑制的ではあるものの、製造業分野に新たな生産のフロンティアを確立し始めたといえる。また、都市中間層の消費生活の分野についても同じことが言える。郊外

型アウトレットや大型スーパーが生まれ、消費者は正札で買い物をするという文化を初めて体験することになる。IT企業のメッカとして成長したバンガロール市には初めて近代的なスーパーマーケットが町の中心部に設けられ、家族連れの市民が買い物を楽しむ姿が日常の風景となった。

同じころ、首都デリーの大学キャンパスにはNokiaブランドの携帯電話が女子学生のファッションの一部となる。また、国際金融と多国籍ビジネスの中心地ボンベイ（一九九五年名称変更、現ムンバイ市）の中心部に携帯電話を片手に往来するビジネスマンを多く見かけるようになる。世界の近代都市のどこにもあるような風景と変わらない。市民の消費生活も確実に豊かさを増している。一〇年前の八〇年代には考えられなかった豊かさが生まれた。一方、農業活動にもかつてない衝撃の波が押し寄せてくる。貿易の自由化は数々の農業投入財、たとえば防虫・防疫の化学薬品、遺伝子組み換え種子などを農村の市場にもたらし始めた。多国籍企業による農業原材料部門への進出は稲作や小麦作、また雑穀類のあらゆる作物の生産過程に影響を及ぼし、さらに農村金融や収穫物のマーケティングにまでその支配力を拡大しつつある。農業生産は拡大し大規模経営の農家所得は増大の傾向にあるという。政府の広報は「絶対的貧困」の人口は今日までに六〇%から三〇%に半減

したと発表している。これについては留保しなければならない。統計の魔術がある。しかし、「相対的貧困」、つまり貧富の格差は拡大する傾向にあるという。これが現実の姿であろう。農民（小農）は急激な変化に対応できず、すでに過去十年間、二万五千人に及ぶ農民（小農）の自殺者を生み出した農村の悲劇は広く世界に知られるところとなった（Forbes/US May 2008）。

今、いったい何が進行しているのだろうか。自由と競争の市場がいま、人口の七〇八割をしめる巨大な農村人口になにをもたらしめているのだろうか。農民は依然として忘れられた存在である。子ども達も都会や農村の区別なく影響を受け始めた。九〇年代のインドは確かに、新たな鼓動を刻み始めた。それは激動の波となって押し寄せている。その一つ、「工業・都市の世界」は世界との経済的接点を強固なものとしつつある。面の広がりが生まれる。一方では、「農業・農村の世界」には変化への「躊躇」や「もろさ」を依然として内包する。二つのあい異なる鼓動に共通する「同根」の問題、「不就学児童労働」の存在が依然として解消することなく、徐々にインド社会の内部を侵食していくのである。その兆候は厳然として存在する。

インド独立後五〇年にわたって社会生活を支配した「社会主義型社会」の建設というイ

デオロギー、そして経済的ナショナリズムという経済孤立主義、これらの呪縛から今、インド経済は解き放たれた。厳密に言えばその過程は現在も進行中というのが正確であろう、しかし、その一方でインド社会は膨大な数の、教育を受けることができない、いわゆる「不就学児童労働」を増殖し続けている。V・S・ナイポールのいう「子どもの反乱」がある。南インド、シバカシ村のマツチや花火を作る女兒、北西インド砂漠の村々に伝統的カーペットや染織品を作る子ども達、ガンジス平野の農村にカーペットを織る子ども達、周辺山岳地帯に広がる子どもカーペット織り工、カルカッタ（二〇〇一年名称変更、現コルカタ市）のスラム街に生まれた「都市児童労働の地」などがその姿である。さらに、都市のサーピス産業に流入した最下層農民の子ども達も増加を続ける。これら不就学児童の存在そのものがインド社会に向けられた「子どもの反乱」と言うことができる。再び、V・S・ナイポールの言う、「自由の理念」と「精神の開放」の代償は「なぜ、子どもは学校に行けないのか」という現代インドに突きつけた最大の課題であろう。これに応えるにはまず、いまだに解き放たれない知的閉塞感を払拭することから始めなければならぬ。四つの乗り越えなければならぬ障壁があることを最後に指摘しておきたい。

## 一一 児童労働市場は存在する

インド各地に子ども達の働く姿にわたくしは、日本の歴史に登場し、そしてその舞台から消えて行った明治期「製糸工女」の姿を重ねていた。山本茂実著『あゝ野麦峠 ある製糸工女哀史』「資料編」他、の歴史統計のなかで「工女教育程度」（明治三三年農商務省発行「職工事情」より）のうち不就学レベルにある工女を示す区分用語と統計がある。

資料によると明治七年、義務教育四年制の小学校が設けられ、卒業年齢は一二歳となる。ある工女調査（小口村役場―現岡谷市）によると、同村工女の最高年齢は一三歳一〇カ月、最低九歳七カ月、平均一一歳一一カ月となっている。また、平野村（現岡谷市）では明治三三年に一三歳未満の子ども工女は二四％。明治から大正・昭和に入っても大きくは変わらなない。就学状況と年齢の関係からして実態を表現する用語は「不就学・子ども・労働」が至当かもしれない。現代のシバカシ村のマッチ工女がそうである。用語のもつ歴史的含意を理解しておく必要がある。労働市場の概念には、労働者は自由に移動すること、市場賃金率は労働の需給関係によって決まる、という前提がこめられている。労働者の熟練・技能別、男子の労働市場や女子（婦人）の労働市場、また雇用の場である産業や業態ごとの労働

市場などその用語と共にその概念化が成立する。すべての労働市場は成人をもつて構成されることが前提とされており「児童労働市場」という用語そのものが使われることはない。その概念すら成立することがない。倫理性が問われるからである。もしあるとすれば経済活動の外に位置する虚構あるいは、摩擦としてであろう。不就学の子ども達がいかなる理由であれ強制をとまなう労働の場、つまりマーケット・プレイスに登場することは「奴隷制度」の時代を除けば世界の近現代史においては考えられない。したがって、「児童労働市場」は現代の思考のなかには存在しないし、また、すべきでないという暗黙裡の倫理的抑制がはたらく。これが一つのレトリックである。ところが、わたくしはあえて「断片的かつ、部分的な労働市場」なる概念を使い、それが反倫理的な制度の所産であることを明らかにしたいと思う。

シバカシ村マッチ工女の事例調査にはほかの地域事例にくらべ多くの時間と労力を使った。聞き取り調査は子ども達は勿論のこと、工場経営者、子どもの親達、県と州レベルの労務行政官達に及ぶ。わたくしの関心事の一つは、シバカシ工女の労働市場は歴史的にも、また、現実的にも成立し、存続し続けていることを確認することにある。幼い彼女等は明らかに労働者である。彼女らはマッチ工女として働くことをさまざまな理由から受け入れ

たのである。それが自発的か、あるいは非自発的・強制的かという問題は残る。大多数の場合、親の言う通りに素直にあるいは説得に応じて工女の道を歩む。一方、工女を必要とする企業側の論理がある。「指先の器用さ」、「指示通りに働く正確さ、従順さ」、「低賃金の経済的利益」などがそうである。

本文で紹介した通り、シバカシ地域には一九二〇年代から今日にいたる長い年月をかけて工女の「需要・供給の関係」が確立されたのである。それを制度化したのが巧妙な子ども集めの仕組みである。「雇用仲介人の組織がある。工場から派遣されたこの組織は少なくともシバカシ「県」全域、また、場合によれば近隣の県にまで工女集め―雇用調達―の仲介を業とする。親への説得、前渡し金の調達、工女就労の念書作りなど、契約手配をおえると、かれらには会社側から成功報酬が支払われることになる。いわゆる工女リクルートの制度が確立しているのである。これが児童労働市場成立の基本型といつてもよい。その特徴の一つに、成人労働者との代替関係が希薄、ないし存在しないという産業特性または生産工程からくる制約がある。シバカシ村の産業、マッチと花火は子ども達によつて成立する生産活動であるため成人労働を必要としないのである。本文で詳述した通り生産方法と技術が子どもの手仕事を前提に成り立つからである。この点が通常の労働市場と異なる

概念上の特殊性である。これを「部分的」と呼ぶ理由である。二つ目は子ども達の労働範囲が同質的な社会・文化環境の枠内に限られるということ。また、地勢上の限定があるという点である。したがって、子ども達が県や州の境を越えて同種の、あるいは関連する労働に移動するようなことはほとんどない。事例調査のうち、唯一の例外は、都市サービス業に働くウドウピの子ども達の、母語の言語圏を大きく越える労働移動の現象である。広く南インド一帯のレストランやホテル食堂に働くウディピの子ども達は「断片的」ではあるが労働市場を形成している。

以上の観察から浮かび上がる問題には二つのレトリックがある。一つは児童労働市場の存在そのものを現実として認めないインド社会の欺瞞性がある。研究者の知的欺瞞、そして政府の行政的怠慢がある。もう一つは児童労働は「子どもの権利」という、確立された普遍的な社会倫理基準から許容できないとする主張についてである。しかし、現実には児童労働が存在することを容認し、その解決・救済の運動を国家権力とともに、進めることを是とする現実主義とその感性に問いかけをしなければならぬ。社会がこれらのレトリックに固執し、「親の無知と無責任」を強調することで現実を説明し続けければ、結果として子どもの教育を受ける権利を奪い、将来の大切な社会構成員となるべき機会を奪い取ってし

まうだろう。

インドの文献・資料には実にさまざまな用語が使われている。Child Labour, Working Children, Children at Works, Bonded Labour などに Slavery など、現実の労働実態を正確に伝えうる用語の摸索である。あるいは不用意な使い方もある。しかし、産業革命期、イギリス資本主義の歴史が生み出した用語や概念はあつても、インドの歴史や思惟・思想が、さらに襲のように折り重なる社会構成を反映したものはない。ただ、インドの現実を熟知したニーラ・ブラー氏 (Neeta Burra) のごとく、“Born to work”; “Born Unfree” は問題の本質を鋭く突く比喩的表現である。「教育を受ける機会の喪失状態」と「自らの意思とは無縁の強制力によって働かされる状態」の子ども達を指し示す用語と置き換えてもよい。わたくしは農村のフィールドにあつて、親に対しては「なぜ、子どもを学校に行かせないのか?」、働く子どもにたいしては「どうして、学校に行かないのか?」、工場の経営者には「なぜ、こんな若い子どもを雇うのか?」、地元の労働監督官には「なぜ、初等教育をうけない子ども達の就労を黙認するのか?」など、教育機会の喪失が子どもを過酷な労働に追いやる現実の世界に対し疑問を投げかけた。これはまさに「教育の貧困」という状態といべきであらう【写真番号 01.033; 03.012; 03.013; 03.016】。

## 三 飢餓的貧困は解消されない

四つの地域報告が扱う児童労働はその主要な発生要因として貧困の存在を前提としていることは論をまたない。問題はどのような計測基準を用いて、家族の生存水準を線引きするかということである。わたくしは「飢餓的貧困」なる概念を使うことにした。人間には誰しも「日々を飢えない権利」がある。この最低の条件さえ満たされない子どもが、しかも想像を超える規模で、現実存在するという事実から目を逸らすことはできない。シバカシ村の工女やラージヤスターンの機織工女、ウディピ村のサービス・ボーイやカルカタ・スラムの子ども達を前にして考えた。子どもは誰でも、学校に行き、勉強したい、という欲求を本能的にもっている。当然のことながら「知」への好奇心がそのような願望を生み出す。しかし、教育の機会は欠乏し、喪失している。このような状態では決して子どもへの知的期待を満たすことはない。初等教育へのアクセスさえできない。そのような教育機会の不在ないし喪失の状態は独立以来半世紀以上を経過してなお、今にいたるまで改善はおろか、悪化しているのである。農民の生活状態も同様である。こうしてこの子ども達は学校より労働への道を歩むしか道は残されていない。さらに子どもを労働に駆り立てる

経済的背景には土地という生存基盤を失った農民の生活状況がある。貧しさの程度は土地資産の有無や程度により決まる。児童労働と農民土地所有の実態はまだまだ十分に実証されていない。わたくしは実際に工場で働く工女の親を訪ね、この二つの輪を結ぶ結節点はじつに教育機会の欠乏ないし喪失にあると考えるにいたった。シバカシ村の事例がある。調査対象三五世帯の「土地なし農民家族」はすべてマッチ工女の収入に支えられた「飢餓線上の生活水準」にある。また、子どもが学ぶための小学校は徒歩圏内にはない。一村に一学級さえない。マッチ工女を生み出す貧困圧力は教育機会の不在という状況とあいまって、子どもをただひとつの生きる道、マッチ工場へと追いやる。インドの最貧困州にランクされるガンジス流域地域ビハール州の稲作農民（小農）の貧困、困窮の状態と比べてもシバカシ村一帯の小農の「生存限界水準」は著しく低い。ここでは、人間が生きるための最低限の生活水準もしくは必要量を生み出す土地すらない世界がある。すべてが土地をもたない農業労働者の生活である。生活のための原資は日雇いの農業労働と子どもの工場労働による。そしてなおも、日々を生きるための、ミニマムの許容レベルに至らない。わたくしを抱く農民像は一九七一年の北インド、ビハール州アラール村に数日間の滞在によつて得られた体験と農民との会話が基礎となっている。

\* \* \*

### 一九七一年ビハール農村調査の回想

家計の収入と支出のデータ収集は困難をきわめる。わたくしはかつて一九七一年、ビハール州ガンジス流域稲作農業地帯シャハバード県 (Shahabad District) アラー村 (Arrah) を対象に農業技術移転の効果分析を行なったことがある。新技術を採用した農民と拒否した農民の所得(収入)を比較することにより、技術移転の所得効果を定量化し評価しようとするパイロット研究の一部である。当時わたくしが所属していたOEC D開発センター(パリ)のプログラムの一つであった。約二週間の村での生活はわたくしにとって貴重なフィールド・ワークの経験である。調査対象の農村はガンジス流域の稲作農業地帯のなかで最も貧しい生活に打ちひしがれた地域にある。これを表現するには「飢餓線上に漂う農民」という言葉以外にない。

家計の収入と支出という貨幣的データはたとえ農民の口から聞き出すことができても、その信憑性は限りなく絶望に近い。作付け面積や収穫量など物量データは村の長老達の証言などでクロスチェックできる。しかし農業や肥料など投入財への支出は過大に、また、

収獲物の市場販売額は過小に、しかも記録はないのが普通で、記憶のなかから引き出すのである。所得に関する聞き取りデータはほとんど意味をもたないことを身をもって知った。なに一つ得心のゆく所得チームのデータは得られなかった苦い経験がある。政府役人の通訳を介するわたくしの聞き取り調査を農民達は警戒したようである。同行した州政府担当官は徴税吏が調査にきたのかと疑われたのかもしれないと言っていた。かつて、一九一七年、M・ガンディーの指導する地代引下げの大衆闘争、反英闘争の舞台として歴史に残る地、チャンパーラン (Champaran) の村はここから車で五、六時間の距離。イギリス人土地所有者と藍小作農民の闘いの歴史があつた地域である。その歴史の記憶がよそ者のわたくしを悪徳代官に仕立てたのかもしれない。笑えないはなしである。

\* \* \*

一九七〇年代の初め、米の高収量品種が試験的に導入され始めたところで、稲作技術の革新が農民に将来を約束しようとした時代である。今までの保守的で、停滞の農民像は市場の変化に反応する普通の生産者行動を示す農民像へと転換が始まるころの話である。この地域の農民の生活は「定常的な貧困状態」、つまり、経済的・社会的変化に反応することの

困難な状態の貧困と定義できた。しかも、その貧困のスケールは飢餓線上にある。農民像は停滞的と描写された。これが少なくとも六〇年代までの開発論に支配的なパラダイムでもあった。わたくしの知る七〇年代の農民像は、土地所有が大きいほど新技術の採用に積極的な経済行動を示す人間と理解した。逆に、土地なし農民はそのようなりスクをとることを逡巡し、結果として高収量の機会を失うことになる。これもまた、農民にとっては「合理的」な判断である。そして九〇年代は市場の変化に対して敏感に反応する経済主体の農民像へと転換する。その背景には、生産手段の土地保有が以前にまして集中化し、加えて農業の世界に自由化・グローバル化が進むなどの経済・社会の大きな変動がある。しかし、他方では土地なし農民層の規模が拡大し「飢餓的貧困」の農村人口が増加し続けていくのである。

#### 四 教育の貧困は構造化する

識字率という、初等教育がどの程度進んでいるかを示す指標がある。生活言語あるいは母語による、読む・書く・理解する能力を測る指標である。一〇年ごとに世界一斉に行わ

れる「国勢調査」が基本となるもので二〇〇一年度調査が最新の統計となる。ところで、児童労働と識字率、そして貧困との間にどのような関係をどう読みとるか。二、三、六頁の表7は対象四地域ごとに県レベルの人口、識字率（二〇〇一年）と「教育機会」の大きさ（二〇〇五、〇六年）を一覧したものである。

それぞれの地域（県）の教育実態は事例調査の各章に解説したのでここではふれない。しかし、平均の識字率と学校（級）数の統計を注意してみると必ずしも有意な関係を見出すことはできない。識字率は国勢調査時点にあつて住民の生活言語ないし、母語による読み・書き・理解する「能力」を示す。その「能力」の根源が公教育／正規教育か、または非正規教育かを問うものではない。インドではヒンドゥー教寺院やイスラーム寺院の、いわゆる「寺院学校」教育が重要な役割を担う。シバカシ地域を含む南インド一帯のタミル語圏ではキリスト教会「教会学校」の役割も決して少なくないといつてよい。また、シバカシ地域の隣接州ケーララ州のマラヤーラム語圏は人口の大部分がキリスト教徒であり、インド全土で最も高い識字率を誇る地である。公教育とともにキリスト教会の果たす役割は大きい。さらに、マラバル沿岸地域カルナータカ州のカンナダ語圏、事例調査の一つ、ウドゥピ地域でもヒンドゥー教、イスラーム教、キリスト教の教会組織が非正規教育に果たす役

割は大きいといえよう。事例調査のもう一つ、ラージャスターン州ジャイプル地域にはイスラームの児童労働が多く存在する。宗教上の理由から女兒が公衆との接触を避けてイスラーム寺院の寺院学校を選択するという。東インド、コルカタ都市圏（平均八〇・九％／女七七・三％）はケーララ州（平均九〇・九％―男九四・二％／女八七・七％）に次いで第二位の高い識字率を誇る（識字率は前記一覽表注記の中央政府データベースによる）。ここは英領インド時代の首都機能を有した大都市圏、高等教育の先達でありキリスト教教育の中心地でもあった。事例調査のコルカタ市スラムには非正規教育を担う各種の低学年学級が機能しており、その結果として高い識字率を示すと考えられる。以上のように四地域の識字率をそれぞれの言語・文化、そして歴史過程の背景で読み直すとき、正規教育とは別の「社会的感性」ともいべき地域社会の成熟度を読み取ることができる。近代化論はこれを「未成熟」な教育組織と考える。わたくしは聞き取り調査の過程にあつて、それぞれの地域には人々を包み込む文化の多層性や価値の多元性ともいべき地域特有の感性の存在をひしひしと感じ取ることができた。

表7. 4事例地域（県）別の識字率と教育機会比較（2005年度）

県	人口規模 (千人)	0～6歳児* (約万人)	識字率	教育機会**
1.シバカシ地域*** (村数：456村)	1,751	11.6% (約20万人)	73.7%	①公立：生徒数/1校 77人 私立：同 184人 ②公立：1村平均 1.4校 私立：同0.9校 ③1校/1学級 8校 1校/教師1人 22校
2.ジュンジュヌ県 (村落数：1,021村)	1,914	17.5% (約33万人)	73.61%	①公立：生徒数/1校 562人 私立：同91人 ②公立：1村平均 1.3校 私立：同 0.1校 ③1校/1学級 14校 1校/教師1人 277校
3.コルカタ（市）	4,573	8.5% (約39万人)	80.9%	①公立：生徒数/1校 120人 私立：同 448人 ②公立：1村平均 121校 私立：同 343校 ③1校/1学級 8.6校 1校/教師1人 7.8校
4.ウディピ県 (村落数：257村)	1,112	10.3% (約11万人)	81.34%	①公立：生徒数/1校 41人 私立：同 67人 ②公立：1村平均 1.1校 私立：同0.2校 ③1校/1学級 18校 1校/教師1人 51校

注 \* 推計値：県人口に対する比率。

\*\* 教育機会（学校の規模）：すべて小学1学年（Class 1）に限る、①1校あたり生徒数。②1村あたり学校数。単位（1学級・1教師）あたり学校数。そのほかく指定カースト>や<指定部族>に与えられる入学特別枠は優遇措置などが含まれる。ここでは詳細を割愛してある。

\*\*\* 行政上、シバカシは現在、市となり、Virudhunagar県の一部となる。

出所：県（District）レベルのデータベース：District Elementary Education Report Card—2005/06, (National University of Education Planning and Administration, New Delhi) による。

- 事例地域の章区分 [1] シバカシ地域：第2章 シバカシ村のマッチ工女  
[2] ジュンジュヌ県：第3章 タール砂漠の児童労働  
[3] コルカタ市：第5章 カルカッタのスラムと児童労働  
[4] ウディピ県：第6章 西ガーツ山脈を越える児童労働

## 五 児童労働は社会慣習化する

四事例の調査は児童労働をめぐる親の子ども観を主要な柱の一つにした。経済行動における主体の意思決定には何らかの社会選択という判断がともなう。子どもの教育についても同じである。子どもにできるだけ高いレベルの教育を受けさせたいという親の願望の言葉を聴く。そこにはある種の「選択」行為がある。親の経済的負担が子どもの将来に貨幣的利益―高い経済的利得をもたらすに違いない、との期待があるはずである。将来もたらずに違いない、と期待する便益があるからに他ならない。現在と将来を比較する「選択」の行為である。また、子どもに進学より就業の道を選ばせる選択という行為もある。先進社会の経験とその理論モデルは、ある社会に支配的な「子ども観」がその社会全体の「社会的厚生」を限りなく極大化するような選択のあり方を説明する。このような立論に沿って現実の世界、シバカシ村という農村社会のなかに「子ども観」の片鱗を探るのである。聞き取り調査では、娘がマッチ工女として働く父親三五名の協力を得た。親への聞き取りはまず、シバカシ一帯の教育機会についての認識から始める。村の公立小学校、寺院などの寺子屋、そのほかのNGO関係の夜間学校の有無など、どの程度知識を持っているかを聞

く。年齢は三五〜四五歳、幼少のころ、初代首相J・ネルーの熱気にあふれた「子どもの権利」宣言（憲法）に酔いしれた年代が大部分を占める。その彼らは小学教育の恩恵をうけることはなかった。親から引き継いだ土地は一エーカー以下が二人、すべてのものがこれを手放すことになる。そして「土地を持たない農民・労働者」に転落した。残りの一四人は生まれながらの「土地なし農民」。彼らは一様に正規教育の機会に恵まれなかった幼少期の体験をもつ。自分の子ども達の将来をどのように期待しているだろうか。

質問の核心部分の一つは生活意欲にかかわる問い、二つは親の自立的意欲にかかわる問い、の二つの問題である。ところで、普通は経済的に最貧困の農民像はしばしば、進歩、変革への意欲や自立心に欠ける人間として描かれている。少なくとも、一九六〇年代初めの農民像でありすでに述べた通りである。しかし、二〇世紀を終えようとする今日（調査時点）、そのような農民像ではありえない、否、そうではないというわたくしの理解がある。これをあらためて確認したい思いがあった。食事の内容と回数を聞き取り、「いま、なぜ一日一回しか、少しばかりの米飯がとれないのか？」。続く問い、「空腹や食事のとれない生活から『自由』でありたいか？」。宿命として受け入れてきた、昔ながらの生活慣習、土地をもたない農民の、どうにもならないその日暮らし、村という村落社会の諸慣習、これら

すべての桎梏から「自由」になりたいという願望は確かにある。村の集会所の庭先に円陣に座った全員の口から「そうだ、そうだ」とタミル語が響く。わたくしはかれらの硬く閉ざされた心に訴えるように、戦後の一時期、未曾有の飢餓状態にあった日本のこと、自身の食糧難に困窮した少年時代の体験を語った。かれらは欠乏からの「自由」がいかに大切なことか、そのために自分の意思がどれほど重要か、わかったように思えた。つぎの課題は「児童労働」に関わる質問である。シバカシ農民にとって生活のなかに「選択」という意思決定の行為は少なくない。親が女兒をマッチ工場に、男児を危険と隣り合わせの花火工場に送り出すには理由があり、選択があるはずである。あらためて選択の大切なことを彼ら自身が確認してほしい、そんな狙いから時間をすこし多くとることにした。この課題に入るころには聞き取り調査から円陣の対話集会の様子が変わっていった。比較的年齢の若い親が発言した。

「村の外側の世界ではものすごいスピードでIT革命が進んでいる。近くの町まで行けばBBC放送やシンガポールTV局の番組も見ることができると。そして、州都チェンナイ市や近接するカルナータカ州バンガロール市などの工科系大学を卒業すれば、アメリカ水準の高給取りになれる。なによりもIT技術管理者として何千、何万の欧米人をインドに

居ながらにして部下にもつことができからね」と。

インドの持つ可能性を予感し、自分の子どもに期待を寄せる言葉がある。子どもの将来進路に思いをはせる親の顔がある。ここに集まる三五人の親全員の願いに違いない。わずかの金銭的余裕でもあれば今の生活を我慢してでも子どもの教育にまわしたい、これが異口同音の答えであった。心底からの願いであると受け止めた。多くの調査報告書や論文には父親の無知や怠惰、また、ギャンプルこそが子どもを児童労働に追いやる元凶として描かれている。親の責任論である。しかし、それはインドの階級社会がもたらした偏見であり、外部者が作り上げた「農民の虚像」と考えたい。ここ、シバカシ村は「児童労働」の地。子ども達は幼くして、男児が花火工場に、女児がマッチ工場に向かう「家計の必要」がある。ニーラ・ブラー氏のいう、「働くために生まれてきた」(Born to Work) 子ども達が必要とされる。そこには世代をまたがり累積する借金 $\parallel$ 負の資産の重圧がある。これが債務労働の主たる元凶である。それは地域全体に幾世代にわたり定着した「暴力的農村金融のシステム」である。子どもの労働はこの搾取のシステムのなかに組み込まれた永続的な労働慣習でもある。これはシバカシにとどまらない。事例調査でとりあげた四つの地域のほかにも数多くの「児童労働の地」がある。わたくしが過去の調査旅行で訪ねた農村貧困の

ベルト地帯はほぼ全土に及ぶ。七〇年代、八〇年代当時も、そして現在も依然として「児童労働の地」であり続ける。それらは、南インド、カルナータカ州のマイソール農村マンディア一带（養蚕・製糸業）、タミル・ナードウ州チェンナイ市郊外農村部（皮革業）、中部インド、デッカン高原（綿花栽培・製品加工・搬送など）、ビハール州やウツタル・プラデーシ州のガンジス川流域農村部一帯（カーペット製造、真鍮加工・製造）など、すべてが「由緒ある、歴史のある」児童労働の地である。そこにはまた、古くからの癒しがたい病巣がある。農民搾取の金融システムがそれである。負債の重圧に親の選択の余地は少ない。子どもを労働の地に送るしかほかに道はない。

## 六 子ども達の「反乱」

今、自由化の波とともに海外資本が農村金融の分野にまで進出しようとしている。農民の運命は地元金融仲介者を介して多国籍金融資本に翻弄される事態が進行している。その衝撃の波は激流となつて子ども達を襲うに違いない。児童労働の人口規模は増大し、内在する問題はますます解決を困難にするだろう。農民に許容される自由と選択の幅は拡大ど

ころか、むしろ狭窄の方向に進むのではないだろうか。その予兆すら見えてくる。発展・拡大を加速する「都市・工業の世界」の出現が現実となり、もう一方の、また、巨大な人口規模の世界、「農村・農業」に進行する変動も進展する。真つ先に激流に翻弄される脆い社会的弱者がいる。それは「教育の機会を奪われ」、「社会の保護もない労働環境下」に、「強制的に過酷な労働を強いられた」、「あまりにも幼い子ども達」である。この増加を続ける不就学児童労働の存在がインド社会と経済のアキレス腱となる。子ども達の声なき「反乱」はすでに始まっているのである。